

国際交流委員会学生指導①

— 教育ファシリテーションの実践と顧問の役割 —

山形 俊之^a

^a 湘北短期大学総合ビジネス学科

【抄録】

本学では活発な課外活動が展開されており、そこに参加する学生の指導は本学教職員の大きな役割の一つである。本論では、学友会国際交流委員会の活動における学生指導を紹介する。学生の成長を企図して1年間で5つの期間に分け、各時期に実施される国際交流活動を詳述しながら、各企画における学生指導の焦点を明確にし、学生を成長させるビジョンについて言及したい。さらに国際交流委員会学生指導における顧問の役割と学生とのかかわり方について考えたい。

【キーワード】

教育 学生指導 ファシリテーション

はじめに

本学は開学以来一貫して国際理解教育に重点を置き、授業のみならず課外活動においても充実した異文化理解教育と国際交流活動を実施してきた。特に国際交流活動は、姉妹大学学生および教職員との交流を中心として、年間を通じて実施されている。その活動を企画・運営するのは本学の全学組織グローバルコミュニケーションセンター（以下「GCセンター」とする）の教職員だけではない。学生の自治組織である学友会国際交流委員会（以下「国際交流委員会」とする）の学生たちが活動の中心を担い、様々なアクティビティーを実施している。そしてGCセンターは学生の活動に対

し、全面的なサポートを行っている¹。

筆者はGCセンターのメンバーとして、そして国際交流委員会の顧問として、約10年にわたり学生をサポートしてきた。2年という短大での学修期間では、12月まで2年生に従っていた1年生を、1月からリーダーとして活動させる必要があるため、学生指導については毎年1から行わざるを得ない。指導法なども学生の能力や質によって常に千変万化である。しかしながら、国際交流委員会の学生指導においては、決して揺るがない目的があると筆者は考えている。それは、「2年間の国際交流活動を通じ、「国際理解力を向上させるとともに、社会に出てから活躍できる人材を育成する」ことである。したがって「委員学生に活動を通じて異文化理解を深めさせ、英語力を向上させる」こと、そして学生を「社会人として必要なコミュニケーション能力、組織運営力、指導力、そして

<連絡先>

山形 俊之 yamagata@shohoku.ac.jp

企画力を身につけた、社会で活躍できる人材に育てる」ことこそ国際交流委員会顧問に課せられた最大のミッションなのである。

本論では、このミッション達成に向けて筆者が行っている学生指導について紹介する。まず、本学の国際交流委員会という組織とその運営について紹介し、2年生リーダー育成の重要性について考察する。次に1年間を5つの期間に分け、各時期に筆者が実際に行っている学生指導を具体的事例とともに紹介する。ここでは各活動における指導内容に焦点を当て、学生の成長、特にリーダーがファシリテーターとして成長する過程を明らかにしたい。最後に、国際交流委員会の学生指導における顧問の役割について考察する。

1. 国際交流委員会という組織と定例会

国際交流委員会は例年50～80名の学生で構成されていたが、平成25年度には約130名、平成26年度には約170名の学生が在籍し、国際交流活動を実施してきた。一方、委員会を運営するリーダーは委員長1名、副委員長1名、会計2名の計4名である。4名にはそれぞれ役割に応じた仕事があるが、委員会活動においては4名がリーダーとして同等の働きをするように指導している。リーダーの4名は、2年生リーダーと顧問、そしてGCセンター長の話し合いによって選抜される。具体的な基準として最も重要視されるのが、活動参加への積極性である。エクスチェンジプログラムにおける企画担当や、各アクティビティーの準備・片付けなど、一見地味な作業に率先して参加していたかを判断する。英語力も大きな判断基準であることは言うまでもない。エクスチェンジプログラムなどで留学生と積極的にコミュニケーションをとっていたか、英語を使用する役割を積極的に担っていたかなどが判断される。さらに、先輩の

みならず同級生に対しての気配りも判断基準に含まれる。

このように選ばれたリーダーではあるが、4名で100名規模の組織を運営するのは非常に困難である。そこで、国際交流委員会では、学生をいくつかの班に分ける手法をとっている。具体的には、2年生最大5名、1年生も最大5名、計10名で構成される班を10班組織する²。各班の班長は2年生が務める。班長も、リーダー同様、1年次の活動状況によって選抜される。具体的な基準としては、積極的に活動に参加していたか、先輩のみならず同級生に対して気配りができたか、それに加えて、1年生に対する面倒見の良さがあるかが判断される。班の運営は班長が行い、グループワークなども2年生班長の指揮下で行われる。図1のように、国際交流委員会では、多人数を少人数に分けて、リーダーや顧問の目が全体に届きやすくなるように組織を構成している³。こうすることで、リーダー→班長→委員学生という流れが確立し、指示系統も整うため、アクティビティーにおける各委員の動きを把握しやすく、より完成度の高い活動につなげることが可能となる⁴。

人数が多い組織の学生指導において、筆者が最も重要と考えるのは、次の2点である。第1に「学生間のコミュニケーションが円滑になること」である。そこで、リーダーおよび班長には、メンバーの名前を覚え、名前呼びかけを徹底する。班の2年生が1年生の顔と名前を覚えて、名前呼びかけすることで、より深いコミュニケーションに発展する。その結果、各班での意見交換も、先輩後輩という垣根を超えて活発に行われることになる。さらに各班におけるコミュニケーション確立が成功すると、定例会やアクティビティーへの参加率が向上する傾向がある。したがって、学生間のコミュニケーションは委員会運営のキーポイントといえる。第2点は「班長の役割と意識づけ」

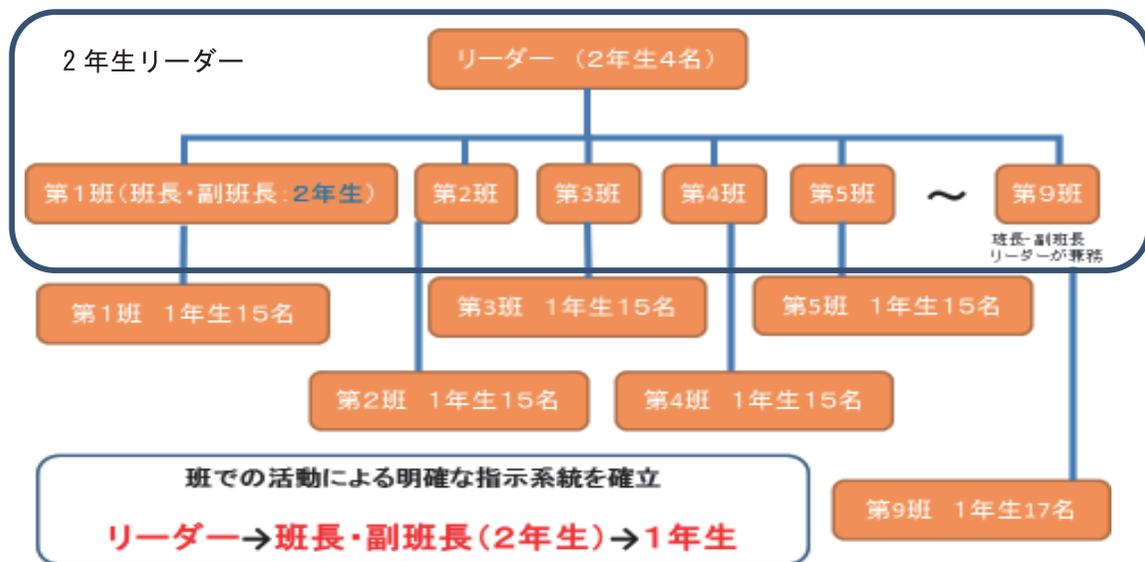


図1 国際交流委員会組織図

である。リーダー4名に対して行う具体的指導については後述するが、班長にはリーダーと同じ情報を常に共有し、班のメンバーに指示を出しながら、活動するように指導している。これは単にリーダーの負担を軽くすることが目的ではない。定例会や企画実施の際にリーダー4人の行う作業は多岐にわたるうえ、企画全体に目を配りながら自分の役割を遂行しなければならない。そこで、各班の委員の動きを班長が把握し、スムーズな運営をいわば裏から支えることが企画成功のカギとなる。なお、この際に班員への指示は班長に一任されている。班長が責任をもって自分の班をまとめることにより、リーダーは全体の進捗を常に確認しながら企画運営できるのである。そのため、班長にはリーダーとともに委員会を運営するという意識づけを行うことが重要になる。このような責任感や高い意識づけは一朝一夕にはできるものではない。そこで、毎週一回の定例会および班長会が深い意味合いを持つことになる。

定例会(右写真)は、毎週一回、全委員が一堂に

会して実施されるミーティングである。ここで、次の企画の進行状況をはじめとする様々な協議事項が話し合われるのだが、それに先立ち、リーダーと班長が「班長会」というミーティングを行っている。班長会ではリーダーが作成した「定例会企画書」を元に、その内容に関する意見交換及び定例会における各班のグループワークの進め方など、具体的な話し合いが行われる。また、アクティビティーが議題の際には、企画書を配布し、その内容についての議論も行う。このミーティングにより班長はリーダーが持っている情報を共



有するとともに、リーダーと同じ立場で活動に参加しているという意識を獲得するに至る。班長は定例会の内容を把握しているため、定例会当日はリーダーの指示を待つことなく、班の委員をまとめることに加え、協議をリードし、ほかの委員から意見を引き出すファシリテーターとしての役割もこなすことができるようになる。それは班長がリーダーと同じ動きをすることに他ならない。定例会や班長会を毎週実施することは、ただ全員が集まって会議を行うのみならず、班長の意識を高めていくことにもつながっているのである。そして班長がリーダーシップを発揮する姿は、他の委員に対して大きな刺激を与え、様々な企画に参加するモチベーションを向上させる要因となっている。

以上のことから、国際交流委員会のような大きな組織運営においては、リーダーのみならず、班長の育成が大きな役割を果たすことがわかる。図1に示したように、リーダー4人が多人数をまとめるのではなく、2年生が一つのリーダー集団を形成することによってはじめて、大勢の委員をまとめ、数多くのアクティビティを学生自身の手で円滑に運営できるようになる。また、毎週実施される班長会・定例会も、ただの打合せではなく、班長がリーダーとしての自覚と責任感を学ぶ教育的価値のある場としての側面を持ち合わせていることも明らかであろう。次章では、国際交流委員会で年間を通じて行われている各アクティビティとそれに伴う学生指導について紹介したい。

2. 国際交流委員会活動における学生指導

国際交流委員会では、11月末から2週間にわたって実施される国際交流プログラム「Exchange Program」を最大の目標として、年間を通じ様々

な国際交流活動を実施している。本章では、各活動における具体的な指導内容に焦点を当て、新リーダーが委員会を運営し始める1月からExchange Programが終了する12月半ばまでの活動を紹介したい。

繰り返しになるが、国際交流委員会学生指導の根幹にある目的は「国際理解力を向上させるとともに、社会に出てから活躍できる人材を育成すること」である。そこで筆者は学生指導に当たり、以下のような育成期間を想定して臨んでいる。各期間内で実施される活動も付記する。

1. 新リーダー育成期間 (1月～2月)
 - ① 2年生フェアウェルパーティー
 - ② 新入生勧誘準備
2. 新国際交流委員会始動期間 (3月～5月)
 - ① 新入生勧誘活動
 - ② 豪州姉妹大学教員のWelcome Party
 - ③ 国際交流委員会親睦会
3. 国際交流委員会成熟期間 (6月～8月)
 - ① Videoconference
 - ② 七夕パーティー
 - ③ 豪州姉妹大学教員のFarewell Party
 - ④ 国際交流委員会夏合宿
(湘北祭準備、Exchange Program企画案募集)
4. ファシリテーター実践期間 (9月～10月)
 - ① 湘北祭 (最終準備～本番)
 - ② Exchange Program企画書作成
5. 全力疾走期間 (11月～12月)
 - ① Exchange Program英語原稿作成
～最終準備～本番

以下には、この5つの期間における学生指導を詳述する。

2-1 新リーダー育成期間 (1月～2月)

国際交流委員会の活動は、12月に選出された新リーダーによる定例会が行われる1月に始ま

る。1月初旬に行われる冬期リーダーズキャンプにおいて旧リーダーから新リーダーへの引継ぎが行われ、1月から定例会は新リーダーが司会進行を務めることになる⁵。ここから1年間の学生指導が始まる。実際この期間にはまだ大きな活動は行われないので、まだ1年生である4名にリーダーとしての自覚と責任感、そしてリーダーの動きを身につけてもらうために集中指導を行う。

前リーダーによる引継ぎが終了した後、リーダー4人には前章で述べたような組織作りの重要性和定例会・班長会の意義について説明し、必ず毎週実施することを指導する。それに加えて次のような点を指導する。

① 国際交流活動の目的

自らが異文化や英語を学ぶのみならず、自国の文化を海外に紹介するという側面を忘れてはならない。学生の意識は前者に向きがちだが、異文化理解には自国の文化を理解することも重要な要素であるから、各企画立案に際しては必ず両方の側面について考えることを指導する。

② タイムマネジメント

後述するように、国際交流委員会では、複数の企画を同時進行で準備しなくてはならない。さらには、2年生は授業や就職活動といった様々な制約の中で活動を実施しなければならない。そのため、一つの企画の準備開始から終了までをしっかりとスケジューリングし、常に早めの行動を意識させなければならない。委員会室には2カ月単位の予定表（ホワイトボード）があるので、それを活用してスケジュール管理を行うよう指導する。

③ マナー指導の徹底

国際交流委員会の活動はGCセンターが全面的にバックアップしている。それに加え、本学国際交流活動には地域の方々による協力のもとに成立しているものもある。すなわち彼らは活動

を通じて様々な人々と関わることになる。そこで、まず挨拶と言葉遣い、特に目上の人に対する言葉遣いと気遣いを徹底指導する。また、学生の人間的な成長を促す意味合いから、委員学生がすべての教職員に対して「先生」と呼ぶことを徹底している。これは、教職員の方々に対しては「指導してくださる方」という意識とともに謙虚な気持ちを持つことを重要視しているためである。そのようなマナーを身につけたリーダーがほかの学生の模範として、そして指導的立場としての役割を果たすことにより、委員全体にマナーが浸透するようになる。

④ ホウ・レン・ソウの徹底

国際交流委員会では、顧問に対しての報告・連絡・相談を徹底指導する。後述するように、アクティビティー実施に際しては必ず企画書を作成させるのだが、計画について必ず顧問に相談すること、そして企画準備の途中経過、リハーサルの様子などを顧問に報告することを必須事項としている。これは、その企画に関して顧問が情報を共有すること以上に、顧問と学生との間のコミュニケーションという観点で重要な意味を持っている。学生サポートをするためには、顧問は常に学生活動の全容のみならず個々人についても把握していなければならない。したがって、顧問のところへ足繁く通わせることは重要なポイントなのである。活動におけるホウ・レン・ソウ徹底の成否は、1年間の活動を左右するといっても過言ではない。

⑤ 企画書・報告書の作成とPDCAサイクル

9月に本学総務部長による「企画書講座」が実施される。これはExchange Programにおける企画書作成に向けて、全委員を対象として実施されるもので、企画実施の目的、企画書の意義、企画書の内容（詳細後述）、そしてPDCAサイクルについての講義である。リーダーは1年次

にこの講座に参加しており、企画書の意義や基本的な書き方については学んでいるため、この時期には実際に書かせることで指導を行う。特に企画書と報告書の役割については再度重点的に指導を行う。筆者が指導するのは、まず企画書は設計図であるから、企画担当者ではなくても企画を実行できるくらい完成されていること、そして委員全員の動きを意識しながら企画書を作成することである。加えて、実行の段階では予想外の展開が起こるのが常であるから、その都度顧問と相談しながら、臨機応変に対応することも指導する。一方、報告書には予定と実際の違いや、反省点およびその改善点を明記させる。この報告書をもとにして次の企画が計画されるため、報告書はPDCAサイクルの要になることを指導する。

顧問による指導の後、GCセンターメンバーでもある本学教務部長より、リーダーの心得に関する指導が行われる。その中で、「すべての活動は、姉妹大学の教職員や学生のためにあるのではなく、委員全員の成長のためにある。」「全員が活動を楽しみながら成長するには、リーダーはどのような立場で委員を統括すべきか。」「全員が活動に参加して満足感を得るにはどうすべきかを考えて行動すること」などが指導される。

これらの指導の実践として、新リーダー初の企画になるのは、「2年生のフェアウェルパーティー」である。一つの企画の実施内容や指導の流れはほぼ共通なので、実例として詳述する。「お世話になった2年生に対して感謝の気持ちを伝える」という主目的に加えて、「参加してくださる2年生や先生方にどのように過ごしていただけるパーティーにしたいか」を盛り込んで企画の目的とし、企画書を作成させる。企画書には以下の内容を明記させる。

- ① 日時
- ② 実施場所
- ③ 実施目的（含む学びや効果）
- ④ 参加人数
- ⑤ 実施内容（詳細別紙）
- ⑥ 費用（支出元）
- ⑦ 使用備品
- ⑧ 役割分担
- ⑨ 当日のスケジュール
- ⑩ 当日までの準備スケジュール
- ⑪ 片付け作業分担
- ⑫ 会場図

なお、①～⑥に関しては企画の概要として1枚に収まるようにし、⑤と⑦～⑫については別紙に詳細内容を記載する。

「2年生のフェアウェルパーティー」は、初めて自分たちで作成する企画書ということから、特に「目的」を意識させた企画書を作成させることに重点を置いている。この企画では、2年生への感謝の気持ちを伝える出し物があるが、その内容に関しては、リーダーと顧問で協議を重ねる。それに加えて企画書については大きく分けて次の2点を確認しながら、修正指導を行う。

A. 全体の流れの確認

費用や備品は企画実施に十分か、スケジュールに無理はないか、担当者は適切に配置されているか、そして実施内容を遂行することで、企画目的は達成できるかなど。

B. 細部の確認

誤字脱字がないか、フォントは正しいか、数字にカンマが付いているかなどである。

重要なことは、なぜその修正が必要なのかを説明し、リーダーに理解させることである。通常3～5回ほどの修正を経て企画書が完成する。

こうして作成した企画書を班長会で新班長に配布し、企画の目的を伝え当日の動きなどを指示・

確認する。定例会においては、他の1年生にも企画書を配布し、各班の動きについては班長から指示を伝える。本番前にはリハーサルを実施させる。顧問はこのリハーサルに参加し、企画書では足りない部分を確認・補足するとともに、司会やスピーカーの話しぶりについても指導する。リハーサルは複数回行われるが、顧問はすべてのリハーサルに参加し当日の動きを確認してから本番に臨まなければならない。

本番中、顧問はリーダーの動きとともにその他の委員や参加教職員の動きに注意している必要がある。この企画では2年生はゲストで1年生が主体だが、動きがごちなく、リハーサルで確認した事項も忘れてしまうようなので、リーダーに指示を出して1年生を動かすことに焦点を置いた指導を行う。また、リーダーには、参加者全体への「目配り・気配り・心配り」を怠らないように指導することも大切である。本番終了後、班長中心に片付けを行うが、その間リーダーは参加して下さった教職員に対してお礼を述べに行くよう指導する。顧問にも挨拶に来るので、そこで講評を伝える。

企画終了後3日以内に報告書の第1版を提出させる。顧問は、そこに以下の内容が明記されているかを確認する。

- ① 予定スケジュールと実際の相違。
- ② その相違が生じた理由。
- ③ 反省点とその改善方法。
- ④ 目的がどの程度達成されたか。

報告書に関しても、企画書同様、数回の修正指導を経て完成版となる。これが企画実施にかかわる一連の流れとなるわけだが、他の企画でも基本的には指導内容は変わらない。企画によって指導の焦点が異なるので、それについては以降、各企画で述べることにする。企画書・報告書の作成は、前期を通じてリーダーに対して徹底指導を行う。

そして原稿修正指導は、どこが欠けていてなぜそれが必要かをリーダー4名に考えさせるように指導を行う。その結果、前期末にはかなり質の良い企画書と報告書を作成することができるようになり、後期には他の学生に指導できる段階に成長する。

2年生フェアウェルパーティーを通じて企画実施について実践的な指導を行ったが、この「新リーダー育成期間」でもう1点指導することは、「面倒くさいことをあえてやる」意義と効果である。昨今の学生は、面倒くさいことを避ける傾向にあると思われる。一方で、アクティビティーを充実した、楽しめるものにしようと思ったら、やはり準備などに手間がかかるのも事実である。そこで、この期間に、リーダーには手間のかかるやり方で効果を出すことを体験してもらうため、時間のかかる、地道な作業を行ってもらう。具体的には4月に入学する新1年生を勧誘するための施策である。50名程度の1年生を入会させるためには何をしたらいいかを考え、実行させる。

作業としては大きく分けると次の3点を作成させる。①CLI (Campus Life Information⁶) と、委員会説明会で使用する委員会紹介パワーポイント、②学内に掲示するポスター、③1年生に配布するピラである。パワーポイントは、前年度実施したすべての活動をまとめ、写真や動画を織り交ぜながら作成するが、ポイントは「楽しそうに見えるか」である。そのため、使用する写真の種類や枚数、スライドの構成など、顧問と学生とで相談しながら作成する。このパワーポイントの縮小版がCLIで使用される。CLIでは、3～5分という制限時間が設けられているので、委員会紹介パワーポイントの中でも特に特徴的な部分をピックアップして紹介することになる。そのため、勧誘というよりも後日行われる説明会に1年生を参加させる工夫について指導する。

ポスター（下図）については、全委員会が紹介用1～2種類を作成し学内に掲示する⁷。これは通常コピーして掲示されるが、国際交流委員会では敢えて掲示する枚数分（4～6種類）のポスターを作成し、学内に掲示する。そしてビラについては、通常1種類のビラを作る。このビラが執行部によって50枚コピーされ、適宜1年生に配布するように指示される。しかし国際交流委員では、ポスターを縮小したものを含めて7～8種類のビラを作成し、1種類は執行部にコピーしてもらうが、そのほかは自分たちで各100～200枚のコピーを作成する。これは、毎日同じビラをもらうより、日替わりで異なるビラをもらう方が楽しいいうえに、注目されるだろうという学生のアイデアで始まった施策だが、これを毎年実施させている。本来であればポスター1～2枚、ビラ1種類を作成すればいいにもかかわらず、国際交流委員会学

生はあえてそれ以上のことをしていることになる。2月初旬で定期試験が終わるとはいえ、インターンシップが行われ、全員が集まることが難しい中でこのような手間のかかる新入生勧誘準備を行うには理由がある。国際交流委員会の活動はすべて授業期間に実施される。すなわち、企画準備は授業やアルバイト、就職活動という様々な制約の中で行われることになる。したがって、限られた時間で手間のかかる準備を行い、最大の成果を出す経験をするには、リーダーの自信につながる重要なポイントなのである。そしてリーダーの成功体験は他の委員に刺激を与え、多くの委員が手間のかかる作業に時間や労力を惜しまなくなるという連鎖を生むのである⁸。

このように、1月～2月は、まずリーダー学生の指導を行い、それを実践させる重要な期間となる。2年生フェアウェルパーティー、新入生勧誘準備を通じて、リーダー4人が国際交流委員会活動の基礎を体験することで、自信をつけるだけでなくリーダーとしての自覚を持つことができるようになる。では次に、新年度に入り、国際交流委員会が本格始動する中での学生指導を紹介する。

2-2 新国際交流委員会始動期間（3月～5月）

新年度、国際交流委員会の本格的な活動が始まる。この期間には①新入生勧誘活動、②豪州姉妹大学教員のWelcome Party、③国際交流委員会親睦会という活動が実施されるが、それに先立ち、新班長を中心とする2年生委員に、最上級生としての自覚を持ってもらい、リーダーに協力するような体制作りをしておく必要がある。そこで、リーダーには、各企画の準備段階も含めた年間のスケジュールを作成させる（図2。）

これを見ると、特に前期には複数の中規模企画



国際交流委員会学生指導①

企画	実施予定日程	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
新入生勧誘	4月		←		→									
豪州教員Welcome Party	5月初旬		←		→									
国際交流委員会親睦会	5月中旬			←		→								
ビデオカンファレンス	6月第1週				←			→						
七夕フェスティバル	7月7日				←			→						
豪州教員のFarewell Party	7月末					←		→						
夏合宿	8月初旬					←		→						
湘北祭	10月中旬						←				→			
クリスマスイルミネーション	11月中旬								←			→		
Exchange Program	11月末～12月初旬													→
2年生Farewell Party	1月末	←	→											
国流タイムズ	毎月		←	→	←	→	←	→	←	→	←	→	←	→
リーダーズキャンプ	3月、5月、8月、1月		←	→	←	→	←	→	←	→	←	→	←	→

図2 国際交流委員会 年間スケジュール

がほぼ同時進行で進むこと、そして後期には湘北祭、Exchange Programという大規模企画に向けて、ほぼ休みなく動かなくてはならないことがわかる。そこに1年生も参加させるには、2年生の動きが大きな鍵となる。2年生が自覚と責任感を持って1年生に接することで1年生のモチベーションを高めることができるからである。ただし、2年生委員に対してそのような動きを説明し、協力体制を作るのは、顧問ではなく、リーダーでなければならない。なぜなら2年生に「自分たちの国際交流委員会」という自覚を持ってもらうことが何よりも重要であり、それを最も強く感じているのは4人のリーダーだからである。顧問がリーダーに指導するのは、2年生委員に「協力してもらう」という意識を持たせることである。そうでなければ、第1章で示したように、2年生を大きなリーダー集団としてコントロールしながら委員会を運営することは困難なためである。こうして2年生全員が一丸となった体制を整えて新年度の活動に入る。

「新国際交流委員会始動期間」における大きな課題は、新体制の国際交流委員会をできるだけ短期間のうちに軌道に乗せることである。そこで前述した3つの小～中規模の企画をリーダーと班長

を中心に実施する。この期間の活動の流れは次のようになる。新入生勧誘に関しては2月から3月で準備を終了し、招聘教員のWelcome Partyの準備を行う。3月に入るとすぐに計画立案に入る。3月半ばには企画書を提出させ、3月中に完成させなければならない。その後、英語原稿を作成し、4月中旬に司会・スピーチ練習、リハーサルを行い、ゴールデンウィーク前後に本番を迎える。1・2年生およびGCセンター教職員との親睦会については3月末から準備し、4月中旬には企画書が完成し、ゴールデンウィーク前にはリハーサルを行う必要がある。そして、ゴールデンウィーク明けに本番を迎える。それでは具体的に見ていこう。

〈新入生勧誘活動〉

国際交流委員会の勧誘活動は、以下の手順で行われる。

① 入学式後のCLI

ここではリーダー4人が入学式後の1年生に向けて3分程度の簡単な説明を行う。具体的な活動よりも、国際交流委員会活動の楽しい部分に注目させ、1年生に対し委員会の名前を周知させることと、説明会に来てもらうことに焦点を当てる。

② ポスターとビラによる周知活動

勧誘期間のみ学内掲示できるポスターは、説明会への参加を目的に作成されているので、活動内容を文字で記すよりも、絵や写真を多用し「見てもらう」ことを意識したものを作らせる。ビラはA6サイズでカラーコピーしたものを使用する。こちらも説明会の情報と写真を中心に作成する。ビラ配布は、班ごとに割り当てを決め、毎朝の正門と、昼休みのキャンパスレストランにおいて1枚1枚手渡しで配布、できる限り全1年生が少なくとも1枚は持っているという状況を作り出せるよう努力する。ここでは班長がリーダーシップを取り、必ず1年生に説明会の時間などを口頭で伝える。重要なことは1年生と直接コミュニケーションをとりながら配布することである。

③ 説明会

説明会では、年間の委員会活動を詳細に説明する。写真や動画を盛り込んだ説明用パワーポイントを作らせ、新入生に好印象を与えるプレゼンテーションを行う。このパワーポイントやプレゼンテーションの内容は、事前に顧問が確認・修正し、リハーサルを実施させ、プレゼンテーション指導を行う。

4月中の勧誘活動実施後は、1年生の定例会への参加を自由化し、具体的な雰囲気を経験してもらう。この時期の定例会では適度な緊張感を維持しながら活発なグループワークを行うように指導する。国際交流委員会では、入会のタイミングは制限していないが、1年生委員の90%は遅くとも5月までに入会する。

〈豪州招聘教員 Welcome Party〉

豪州姉妹大学から前期中来学する招聘教員の Welcome Party は、国際交流委員会最初の公式行事であり、司会やスピーチなどすべて英語で行わ



れる点と、本学学長も出席する大学行事としての側面を持っていることが他の企画との大きな違いである⁹⁾。企画担当者はリーダーで、司会も原則リーダーが行う。企画書の目的には「招聘教員に本学と国際交流委員会について理解してもらうこと」が明記され、実施内容に学長、GCセンター長、招聘教員の挨拶と委員長の挨拶が加わる。いわば国際交流委員会初の責任ある企画となるわけだが、学生指導の要点としては2点あげられる。まず、大学行事の側面があることから、招聘教員のみならず参加教職員全員に対して気を配ること。そしてなるべく多くの学生（特に1年生）が、招聘教員と一言でもいいから言葉を交わすことができるように取り計らうことである。特に後者に関しては、企画段階で顧問とリーダーで議論する必要がある。また、企画目的を遂行するために、委員会紹介の英語版パワーポイントも作成させる。

全てが英語で行われる初めての企画なので、準備には長い時間がかかる。過去の原稿を参考に下書きを作成させた後、顧問がその添削を数回行い、完成後はGCセンター長とのスピーチ練習を行う。なお、スピーチ練習に際しては、GCセンター長に面会し、練習時間の予約を取ることを徹底している。これは社会人としての常識を実践的に学ばせるためである。リハーサルについては本番1週間前に行うので、4月中のほとんどは英語原稿と向き合うことになる。報告書には、英語原稿作成

を含め、準備段階で足りなかった部分の反省点や、本番における他の委員の動きについて気づいたことを明記するよう指導する。

〈国際交流委員会親睦会〉



この企画は「1年生と2年生およびGCセンターの教職員との親睦を深めること」を目的に実施される。原則的にはリーダーが全体の企画を行うが、ゲームについては他の2年生から担当者を出してもいいことにしている。この親睦会では班に分かれての食事とゲームを通じて、班員の顔と名前を覚えることが最も重要なポイントである。そして、ゲームについては、大人数で実施できること、そして何より「誰一人飽きさせないようにすること」を考えて企画させなければならない。顧問は企画担当者及びゲーム担当者と何度も話し合いを行うが、ここでは、指導者というよりファシリテーターとして議論に参加する必要がある。つまり、学生の意見を聞き、ベストなプランを引き出すことが重要である。過去の例を見ると、トーナメント方式のゲームは避け、全員で実施できるゲームか総当たり戦の形式のゲームを実施した。なお、この親睦会は、顧問やGCセンターメンバーにとっても、委員学生を把握する絶好の機会となるので、GCセンターメンバーにとっても重要な意味合いを持つ企画となる。

このように、この時期には英語で行う企画と

ゲーム中心の企画を通じて、リーダーは国際交流企画の運営と企画準備に必要なスケジュール管理、パーティー企画の運営方法を実践的に学ぶ。また、班長にとってもグループをまとめながらリーダーシップを身につける絶好の時期であることも忘れてはならない。

2-3 国際交流委員会成熟期間（6月～8月）

この期間が前期中で最も多忙な期間であろう。実施する企画としては、6月に「ビデオカンファレンス」、7月に「七夕パーティー」と「招聘教員フェアウェルパーティー」、8月には「夏合宿」というように、委員全体または全学学生・教職員を参加者とした中規模の企画が連続する。それに加え、後期に行われる「湘北祭」の準備が6月から、「Exchange Program」の企画案の募集が7月から開始されるなど、多数の企画準備がほぼ同時進行で行われるのである。しかし、これだけの活動を行うからこそ、学生が大きく成長を見せる時期でもあることから、この時期を「成熟期間」とした。この時期は学生指導においても集中力が必要になる時期でもある。2年生は就職活動も本格化してくるので、活動への集中力が散漫となるばかりか、時間的に非常に限られた中で作業しなくてはならない。そのため、学生指導も集中的というわけにはいかず、学生の時間を考慮しながら適宜行う必要がある。そして、学生の成長のタイミングに集中しながら指導することが重要なポイントとなる。ではこの期間に実施される個々の活動を具体的に見ていこう。

〈ビデオカンファレンス〉

ビデオカンファレンスと七夕パーティーは連動している企画である。ビデオカンファレンスは、「日本の伝統文化である七夕を豪州姉妹大学学生に紹介する」ことを目的に、ビデオ会議シス



テムを用いて、前年度のExchange Programに参加した姉妹大学学生と交流を行う企画である。企画内容としては、七夕とは何かをわかりやすく伝えるために七夕物語の英語劇を上演する。そして、日本で行われている七夕祭りについて紹介し、姉妹大学学生から願い事を募集する。本企画の特徴は、織姫と彦星の物語を劇で上演することで、多くの学生が役割を与えられて企画に参加できるという点である。また、2年生が姉妹大学学生との再開を喜んでいる場面を見て、1年生がExchange Programへのモチベーションを高める効果もある。したがって、前期の大きなハイライトとなる企画ともいえよう。この準備は4月から行われ、日程調整、姉妹大学学生への参加要請をリーダー中心に行う。企画立案はリーダーが行うが、劇を行う上で、配役のみならず監督、撮影、大道具、小道具など担当者を決め、約30名の学生が主担当となる。その他の学生は当日会場に集まり、モニターで様子を見学する。また、当日参加できない姉妹大学学生のために、事前に劇をビデオ撮影し、Facebookページにアップロードする。このFacebookページのアドレスはExchange Programの際に姉妹大学学生に伝えているため、過去にExchange Programに参加した多くの学生が閲覧可能となっている。

この企画においては、英語劇を行うので英語原稿の添削はあるが、学生指導というより学生の準備

作業に参加するのが顧問の大きな役目である。本企画で担当者になっている学生は、その後の活動で中核的な役割を果たす可能性が高い。したがって、主戦力の学生を把握しておくことは今後の活動をサポートするうえでも非常に有効なのである。具体的には、大道具や小道具の作成、カメラチェックなどを手伝うのだが、アイデアを出すだけでもいい。作業の中で、学生とコミュニケーションをとり、学生の性格や能力を見極めることが重要である。また、多くの学生が役割を持っていることから、リーダー以外の学生も達成感を味わうことができる企画ともいえる。だからこそ、顧問がその作業段階からサポートをすることは、顧問に対する信頼感や安心感を獲得することにつながる。これこそが学生指導を浸透させる素地になるものと筆者は考えている。

〈七夕パーティー〉

七夕パーティーは、全学学生および教職員が参加できる企画となっており、学内に笹を飾り、七夕を祝うのみならず、日本の伝統文化である「七夕を再認識する」という趣旨の企画である。内容としては、学生・教職員から短冊を募集する。そして7月7日に七夕パーティーを実施する。このパーティーでは、軽音楽サークルや吹奏楽サークルによるパフォーマンスも行われるが、ハイライトは、特徴的な願い事を選出して表彰する「七夕短冊コンテスト（以下「コンテスト」とする）」である。

この企画の準備はかなりの時間を要する。前述したように、この企画はビデオカンファレンスと連動しているため、4月から準備を始める。5月中に企画書を完成させ、有志団体を決定し、打ち合わせを行う。ビデオカンファレンスが実施される6月初旬から月末までコンテスト対象となる短冊の募集を始め、同時進行で笹の装飾物作成を

委員全員で行う。これは笹が届いたらすぐに装飾を行い、学内に飾り付ける必要があるためである。笹の装飾が終わり次第、リハーサルを含めた七夕パーティー当日の最終準備に入る。このパーティー実施における学生指導は次の3点に焦点を当てる。まず準備にできる限り多くの委員を参加させることである。これは後期の活動を見据えたものであることは言うまでもない。そのためには班長が中心になって人員を集めることが重要である。それでも参加しない学生が多い場合は、定例会で顧問が直接指導をする必要も出てくる。次に、外部団体が参加するので、リーダーには出演団体との打ち合わせを綿密に行うことを指導する。特に当日のタイムスケジュールや照明などの演出、司会による紹介など、当日の動きについての詳細な打ち合わせを重ねることが重要となる。3点目には、告知作業を徹底することを指導する。全学学生に参加してもらうことが目標なので、ポスターのみならず、班ごとに担当を決めて数日前から学内放送などで参加を呼びかける。この企画を通じてリーダーを含めた2年生委員が、委員全員を活動に参加させる方法、そして全学的な活動の実施方法について学ぶ。この学びは後期に行われる大規模企画において十二分に活かされる。

〈豪州招聘教員 Farewell Party〉

招聘教員のFarewell Partyが7月末実施される。この企画は「招聘教員に4ヶ月お世話になったことに対して感謝の気持ちを伝える」ことを目的とする。この目的を達成するために、招聘教員への贈り物やビデオメッセージなどを班ごとに作成する。ここでリーダーシップを発揮するのは班長である。班長が呼びかけと時間調整を行い、全員で作業を行う。また、司会やスピーチなどにリーダー以外の委員を選出するのも、原則的にはこの企画からである¹⁰。したがって、企画担当者はリーダー

だが、委員長以外スピーチや司会進行は担当しないことになる。これは、他の委員にも責任ある役割を与えることによって、委員の国際交流活動へのモチベーションを向上させることが狙いである。同時にリーダーに管理者としての働きを学ばせるのも大きな狙いである。リーダーはこれまでの企画運営で学んだノウハウを元に、担当する学生に指示やアドバイスを与え、全体の流れを見ながら企画全体を管理する。このように他の委員を徐々に活動の中心に参加させていくこと、そしてリーダーに管理者としての役割を与えることは、後期に向けた委員会全体のモチベーション向上につながる。

〈国際交流委員会夏合宿〉

この期間には後期の活動準備が始まる。10月の湘北祭と11月末からのExchange Programである。特に湘北祭に関しては、前期のうちに80%程度準備を進めておかなければならない。

国際交流委員会では、湘北祭で2種類の催しを行う。一つは世界の時事問題についての調査・展示である。前期のうちに展示のテーマを決定し、班ごとに異なる国々について調査を行う。その結果を模造紙2枚にまとめ、展示する。前期が終了するまでに、班員で協力して調査を行い、模造紙に下書きを完成させる。顧問は、内容や誤字・脱字をチェックする。テーマが時事問題になるので、内容は決して理解しやすいものばかりではない。しかし、色合い、強調、イラストや写真などを効果的に使用し、お客様に「見てみたい、読んでみたい」と思わせるものを作成するよう指導する。下書きが完成したら夏休み中に着色し、後期が始まるまでに完成させる。

もう一つは海外の飲食物を出店することである。海外発祥で日本に根付いたものでもかまわない。飲食物に関しては、5月～6月にかけて決定

しなくてはならないので、定例会でアンケートを行い、内容を決定する。その際に指導するのは、「その食事を選んだ理由」を明確にすることと、コストパフォーマンスを考えることである。前者については、「国際交流委員会が飲食物を出店する意義」を学生が考えることにつながるため、必要に応じてその食品に関する調査も実施させる。

この2つのテーマが決まり次第、リーダーは湘北祭の企画書を作成する。通常の企画書と異なるのは、食材リスト、調理器具、調理法、予想される支出・収入、などが明記されることである。最終的に提出される企画書には、当日のシフト表、会場図（展示場所と室内装飾図も含む）、委員の当日の動きが加えられるわけだが、その詳細について議論する場が、8月に実施される「国際交流委員会夏合宿」である。

夏合宿は8月の初旬に1泊2日で実施され、リーダーと班長のほか、任意の学生が参加する。さらにGCセンターからも、センター長をはじめ数名の教職員が参加する。合宿施設の予約が必要なことから、6月頃には企画準備を開始し、参加学生を募集する。この合宿の目的は、「後期に行われる企画について詳細な話し合いを行うこと、そして、委員の団結力の強化である。」具体的には以下の点について話し合う。

議題1 湘北祭について

- ・展示物の進捗状況確認。
- ・具体的な調理方法や、食材、調理器具の確認。
- ・当日の委員の作業とそれぞれの動き方の確認。
- ・前売り券について（実施の有無と値段や枚数など。）
- ・教室レイアウトについて。
- ・お客様への宣伝と、呼び込み方法。

議題2 Exchange Programについて

- ・アンケートをもとに、委員会ら提出された企

画案について、実施の可否を含めて議論する。

- ・準備スケジュールの作成と確認。

2日間にわたって行われるミーティングでは、リーダーが司会進行を行う。委員5～6人で構成されているグループを作り、グループワークの形式で上記の話し合いを行う。そして話し合いの結果を班ごとに発表する。結論が出なかったものについては、後日顧問と再度話し合いを行い、夏期リーダーズキャンプにて結果を委員にフィードバックする¹¹。顧問は話し合いがスムーズに進むように進行を常に確認する。また、話し合いに際しては、学生間だけではなくGCセンター教職員からの意見も何うように指導する。この話し合いの結果は後日行報告書として提出されるとともに、湘北祭企画書に反映される。

「委員の団結力の強化」については、2つの側面から目的達成を試みる。一つはミーティングでのグループワークである。もう一つは、1日目に懇親会を実施し、レクリエーションが行われる。毎年実施する内容が異なるので詳細は割愛するが、レクリエーションではゲームやスポーツ、花火大会など、全員で楽しめるものになっている。この夏合宿は、委員同士の連携をより強固なものにし、後期活動へのモチベーションを高める重要な企画となっている。

夏合宿においては、リーダーが全体の進行を適





切に行うように指導することが重要である。前期末の招聘教員Farewell Partyから、委員学生に企画を担当させ、リーダーは全体を取りまとめるように役割をシフトさせている。これは、後期の活動を意識してのことだが、この夏合宿でもリーダーは全体の進行役に徹する。タイムキーパーを行い、書記が出た意見を板書するなどして記録し、委員長が全体を取りまとめる。こうすることによって、主体は参加している委員学生のグループになり、参加者は積極的な意見交換や議論をすることができる。したがって、リーダーが参加者全員から意見を引き出し、活発な議論を促しながら議事を進行できるように顧問がサポートを行う。

このように、6月～8月は企画も多く、その準備がほぼ同時に進行するという極めて難しい期間であるが、この時期が国際交流委員会の成熟期間と筆者は考える。その理由としては、リーダーがこれまでの経験を活かして、徐々にファシリテーターにシフトしていく時期であること。そして、班長のみならず、委員学生が様々な役割を与えられ、責任感を持って企画に臨むことによって学生に変化が見られる時期だからである。特に夏合宿に参加した学生は、後期活動の中心となって活躍することからも、この時期が委員学生一人一人の人的成長を促す重要な時期とっていいだろう。

2-4 ファシリテーター実践期間 (9月～10月)

後期に入り、12月のExchange Program終了までは切れ目なく活動が続くのだが、学生指導の観点から、10月に実施される湘北祭までをひとつの区切りとして考える。この期間に行うのは、「湘北祭の最終準備～本番」と、「Exchange Programの本格的始動」である。どちらもこれまで以上に複雑な作業を含むうえ、同時進行となるので、月毎に見て行くほうが理解しやすいと思われる。では、まず9月中の活動に目を向けよう。

〈9月の活動〉

「湘北祭」については、各班の展示物が9月上旬に完成を見る。夏期休暇中に完成させておくことが望ましい。9月中旬には飲食物の試作会が行われる。この試作会にはリーダーと班長が参加し、調理時間、味などの最終調整を行う¹²。リーダーはこの結果を元にした調理マニュアルと、受付や会計など各担当者向けのマニュアルを作成する。これらを全て掲載した状態で湘北祭の企画書が完全版となる。この段階までを9月中に完成させられるように、顧問は進捗状況を常に確認しなければならない。

「Exchange Program」について9月中に行うことは、「企画の決定」と、「企画担当者選定」、「企画書講座の実施」である。夏合宿での協議結果をもとに、顧問やGCセンター教職員と相談し、企画を決定する。Exchange Programでは例年10～15の企画が実施される。Exchange Programの企画は大きく分けて以下の3種類があげられる。

- ① GCセンター主体の企画（相模里神楽鑑賞、十二単実演、高校訪問、日本語授業、厚木市長表敬訪問、ソニー・ザ・スクエア訪問）
- ② 例年必ず実施する学生企画（Welcome Party、Farewell Party、ディスカッション、鎌倉訪問研修など）

③ 夏合宿で選定された企画（日本の伝統文化学習¹³、日本のサブカルチャー紹介、ホームステイで使えるカンタン日本語講座、日本の歳時記、スポーツ大会、ダンス企画など）

上記のうち、学生が企画運営を行うのは②と③である。この二つはその性質の違いから、企画者選出方法が異なる。②についてはリーダーと顧問で話し合いを行い、企画担当者を選出する。なぜなら、これらに企画にはゲストが参加することや企画の難易度が高いことなどの理由から、実力のある委員を選出する必要があるためである。③の企画担当者については定例会で募集を行う。ただし立候補者がなかった場合、リーダーと顧問で選出する。企画担当者選出においては、リーダーと班長が委員のことを熟知しているかが重要である。企画担当者は、英語力はもちろん、定例会への参加率、企画参加への意欲、性格、責任感などを考慮して選出することになる。したがって、これまでの活動を通じて委員一人一人を把握していなければ、この企画者選出は非常に難しい。こうして一つの企画に対して2名程度の担当者を選出する¹⁴。企画担当者が決定したら、まず各企画の参加上限人数を指定する。上限人数については、企画担当者とリーダーで案を出し、顧問と相談のうで決定する。そして定例会において企画内容の概略を説明し、企画への参加希望者を募る。参加希望者が多かった場合には、企画担当者、リーダーそして顧問で協議して選出する。その際の基準は、これまでの企画および定例会への参加実績、つまり活動への参加意欲である。このように参加人数が決定したら、企画書講座を行う。

「企画書講座」については2-1で触れたが、本学総務部長による講義が行われる。この講座の前半においては企画の意義や企画書の必要性、PDCAサイクルについてなど、社会に出てからも役に立つ内容が説明される。この企画書講座によって学

生は企画運営に必要な基礎的知識を学び、企画書と報告書の意味合いを学ぶことになる。また、後半には実際に過去の企画書の例を参考にしながら、企画書の内容に必要な事項（詳細は2-1参照）も学ぶ。この講座はその年のExchange Programのみならず、翌年の活動にも大きな影響を与える重要な講座なので、全委員に出席を義務付けている。この企画書講座を経て、企画書作成が開始される。

〈10月の活動〉

10月に入ると、湘北祭までの実質約10日間は最終準備期間となる。実際に行うのは、教室内装飾や看板、ポスター作りなどの作業が中心になる。湘北祭企画書の装飾図面にあわせて、装飾品を手作りする。ここで重要なことは、委員全員でこの作業に当たらせることである。そのため班長には準備スケジュールが配布され、各作業を班ごとに分担する。リーダーは、自らも作業を行うが、むしろ各班の動きを見ながら指示を出す監督者としての役割を果たす。ただし、班員に直接指示を出すのは班長の役割である。これは指示系統が複数になることにより、情報の行き違いや勘違いが発生するからである。そのようなトラブルを避けるためにも、リーダーと班長は情報を共有し、同じ立場で作業にあたらねばならない。

湘北祭の前日には全ての装飾を完成させ、リーダーは当日のシフトなどを班長とともに確認する¹⁵。当日は企画書と運営マニュアルに沿って実施される。とはいえ、リハーサルを全委員で行ったわけではないので、マニュアル通りに運営されるまでには時間を要する。そこで、リーダー4名は受付、会計、調理などを分担し、シフトに入っている委員に指示を出さなくてはならない。そこで、顧問が全体を見る役割を担う。終日学生の様子やお客様の動向を見ながら、適宜指示や確認

を行う。湘北祭の飲食物は売り上げ目標があるので、それをクリアできるようにサポートすることが顧問の役割とっていいだろう。1日目終了後には反省会を行い、2日目に向けてマニュアルの修正や委員への指示内容の確認を行う。顧問はこの反省会に同席し、1日目の講評を述べるとともに、翌日への改善などについてリーダーと話し合う。2日目には班長がリーダーに代わってシフトを管理する時間が多くなる。これはなるべくリーダーに自由時間を与えるためである。リーダー4名は、1日目はほとんど動くことができないので、2日目に最後の湘北祭を楽しんでほしいからである。2日目終了後は委員全員で片付けを行い、すべて終了したのちリーダーが委員を労う。顧問も講評を述べて、ねぎらいの言葉をかけるとともに、Exchange Programへの意識づけを行う。

湘北祭終了後1週間以内にリーダーは報告書を作成する。通常と異なる点は、リーダーが各班長からヒヤリングを行い、準備段階から当日のシフト内での反省点や改善点など、かなり細かな点まで記載されることである。もちろん売上計算の結果も明記される。修正指導は行うが、第1版から完成度が高い報告書が提出される。実際には、湘北祭がリーダーによる最後の企画となる¹⁶。したがって、湘北祭が最後の報告書になるわけだが、1年間の成長がよくわかる報告書が提出されるのが毎年印象的である。湘北祭で指示を出しながらきばきと動くリーダーの姿は、他の委員にとっても大きな刺激となり、Exchange Programへの高いモチベーションにつながることはいうまでもない。では同時期のExchange Program準備に目を向けてみよう。

9月下旬に行われた企画書講座の後、企画担当者は企画書の作成に入る。企画担当者の多くは、留学生との交流に積極的な学生であるが、企画を一つ任されるのは初めてである。そこで、リー

ダー4名がそれぞれ3～4つの企画を担当し、企画担当者をサポートする。その際に、10月からExchange Program開始までの準備期間は約5週間と考えて計画的に行動することを企画担当者に徹底させる。顧問への企画書の第1版提出は10月の第1週が予定される。そして添削を受けたらその3日後に訂正版を再提出する。修正指導を数回繰り返し、湘北祭までに企画書が完成していれば望ましい。遅くとも10月中には企画書を完成させる。企画書が完成した後、英語原稿作成に取り掛かる。英語原稿もすべて顧問が添削を行う。英語原稿が11月の1週目までに完成していると、11月の準備活動にかなり余裕を持たせることができる。

以上のように、この時期は湘北祭の最終準備から本番という中でExchange Programという国際交流委員会最大の活動に向けての準備が本格始動するという、時間的にも作業内容の点でも最もハードな期間である。リーダーは常に両方の企画に目配りをする必要があるため、班長と連携して委員の指導を分担する。特に湘北祭は班長に管理を任せることで、リーダーはExchange Programの進行具合を確認することができる。しかし企画担当者に対してリーダーが手とり足とり指導している余裕はない。そのため、リーダーは前年度の企画書や報告書を参考に、企画者からアイデアを引き出し、企画の具体的内容を考えさせるというファシリテーターとしての役割を実践することになる。この準備として、前期末の企画からリーダーにはファシリテーターの立場をとるように指導をしてきた。他の委員に企画を担当させ、リーダーはその進捗状況と全体の流れを確認するとともに、企画担当者へアドバイスなどを行い、より良い企画実現へのサポートができるかどうかで、Exchange Programの成否が大きく変わってくる。

この時期の顧問の重要な役割は、全体の進行具合を確認することと、リーダーと班長の意思疎通が図れているかどうかをこまめに確認することである。また、地道な作業が長く続くことから、委員学生のメンタル面でのケアも必要になる。実際にはリーダーが委員学生のケアをしてくれているので、顧問が直接関わる必要はないことが多いが、委員全体が動くことにより、この時期が最も委員会内でトラブルが多発するの事実である。主な原因としては、活動に対する熱意の差によるものがほとんどである。

一方で、Exchange Programの準備が始まると、その対応も行わねばならない。1月に行われた2年生フェアウェルパーティーの学生指導を思い出していただきたい。新リーダーが初めて行う企画ということで、企画書の内容を細部に至るまで確認し、修正指導を行った¹⁷。ここでは、その修正指導を約15本分行うことになる。リーダーから、企画書はなるべく早く提出するように指示されているが、やはり提出締切当日に複数の企画書が一気に提出されることが多い。そうすると、企画書の添削に多大な時間を費やすことになる。第1版の修正指導を受けたら、訂正された第2版を3日後に提出させることになっているので、波の如く次々と企画書が提出され、湘北祭学生指導との両立が非常に難しくなる。そこで、第2版以降の修正指導には、企画をサポートするリーダーを同席させることにしている。修正の意味を理解したリーダーが、第2版作成の際に企画担当者に説明し、より良い内容にすべくサポートを行う。このようにリーダーとの連携を取ることで、企画書の作成指導と湘北祭学生指導を両立させることが可能となる。ここでもリーダーの成長が不可欠になる。いずれにしても、学生のみならず、顧問にとっても10月から11月は多忙の極みに達する時期といえるだろう。

2-5 全力疾走期間 (11月～12月)

ここが、国際交流委員会にとって、正に集大成というべき期間である。11月末から12月上旬の2週間にわたり、委員会最大のアクティビティーであるExchange Programの本番を迎える時期である(下図:鎌倉訪問研修。)2-4において、企画書の完成を湘北祭前、遅くとも10月末に設定したことを述べた。これは、湘北祭からExchange Programまでの期間は、創立記念日や振替休日、推薦入試など休校が多く、準備のために十分な日程が確保できないためである。例年は実質的に15日前後の日程しかない。さらに、留学生を迎えるにあたって、本学6号館をクリスマスイルミネーションで装飾する作業も行われる。これは9月から準備をはじめますが、Exchange Programが始まるまでに、装飾作業を行う。また、11月2週目の週末には厚木市が主催する「あつぎ国際大道芸」にも国際交流委員会学生がボランティアとして多く参加する。こうした細かなイベントも行われる中で、Exchange Programの準備を進めなくてはならない。国際交流委員会学生にとって、最後のゴールに向けて止まることを許されないこの期間をマラソンなどにおける最後のスプリントに例えて、筆者はこの期間を「全力疾走期間」と名付けた。この期間で行うのは、Exchange Programの最終準備と本番のみであるが、その準備内容は大きく



分けて2つある。一つは英語原稿作成とその練習、もう一つは企画の準備作業とリハーサルである。まずは前者から見て行こう。

英語原稿の内容は企画によって異なるが、一般的には司会、スピーチの原稿、ゲームなどがある場合はルール説明を含む進行全般、日本文化学習などではプレゼンテーション原稿、そしてパワーポイントなどが含まれる。そのような内容の詳細に触れたいが、紙面の関係もあるので、ここでは英語原稿作成指導のポイントにのみ焦点を当て、頻出する2つのパターンの英文指導について述べたい。

第1に「資料をそのまま引用された」英文原稿である。これはプレゼンテーション企画でよくあるパターンである。日本文化紹介の企画を例に挙げると、学生は発表内容についてリサーチを行い、留学生に理解しやすい内容にして英文を作成する。昨今インターネットの発達により、日本の文化や風習について英語で書かれたサイトも散見されるようになった。また、本学図書館にも参考資料として日本に関して英語で書かれた文献もあることから、そうした資料を利用する学生が増えていることは喜ばしいことである。しかしながら、その英語をそのまま引用した英語原稿が提出されることがしばしばある。確かに書かれている内容は正しいのだが、たいていの場合英語が高度過ぎて、学生が理解できていない場合が多い。さらにプレゼンテーションの形で口頭説明するにもかかわらず、説明的な英文をそのまま使ってしまうのである。この場合、学生には日本語の例を挙げて、口語と文語の違いを理解させるところから指導しなければならない。そのうえで、なるべくわかりやすい語彙や表現を用いて再度作文するように指導する。英語原稿は数回の修正を重ね、完成度を高めるが、学生自身が理解したうえで留学生に伝えられる英文になるよう、学生の語学力なども考

えながら修正することが重要となる。このパターンは、ルール説明の必要なゲーム系の企画や、学外訪問研修などにも当てはまる。

第2のパターンは「翻訳サイト盲信」の英文原稿である。これは添削するのに非常に時間がかかる。第1のパターンとの違いは、そもそも英語として成立していない文章が多い。つまり、「言いたいことは何か」という根本的な部分を探りながら添削しなくてはならない。この場合、日本語と英語の違いを説明するところから指導を始める必要がある。そのうえで、翻訳サイトを使用するならば、日本語に主語や目的語、助詞を完璧に入れなければ理解できる英文を作ることはできないことを徹底指導する。それから作られた英文を再度添削するが、それでも意味がわからない部分が散見する。それは日本語がそもそも間違っているか、必要以上に難しい表現を使用していて、翻訳サイトが対応できないことが原因である。こうなると、日本語表現の指導をしてから英語に直させるという手順を踏まなければならない。このように、翻訳サイトを頼り過ぎてしまったパターンでは、推敲回数が非常に多くなり、1回の指導時間が長くなることが特徴として挙げられる。本来ならば翻訳サイト使用禁止にしたいところではあるが、翻訳サイトが学生に入手可能なツールであるならば、筆者としてはむしろ正しい使い方を指導し、実践的に使用法を学ばせる方が教育的な意味合いがあるのではないかと考えている。

このように3～5回の修正を重ねて英語原稿が完成したら、2-2で触れたようにGCセンター長の下で読む練習を行う。同時にパワーポイントの作成も英語で行う。これも顧問が添削指導を行う。パワーポイントが使用されるのは大きく分けて①企画の進行が示される場合と、②補助資料として使用される場合である。どちらの場合にも共通する注意点は見栄えであろう。色合い、フォント

の大きさ、写真や図などが適切か、またそれらに適切な英語の説明が付されているかなどを確認する。実施会場によってスクリーンの大きさが異なるので、それも考慮して見易さも指導しなくてはならない。そして、特に②の場合には、話す文章をそのままパワーポイントにコピーしていないかということに注意する。パワーポイントは写真やグラフなどで口頭説明の補助するものである。にもかかわらず、説明内容の文章がそのまま1ページに詰め込まれているスライドも少なからず見られる。この場合、口頭説明を簡潔に書き直させるところから指導し、修正させる。そして、写真や図などを挿入し、完成までにやはり3～5回の修正指導を行う。さらに、企画によっては、大道具や小道具に書き込む英語もすべて添削する。このように本番直前まで、顧問は英文原稿の添削指導に授業以外のほとんどの時間を費やすことになる。

こうして全ての準備が整った後に、企画リハーサルを行う。Exchange Programにおいては、「参加する学生は全員企画担当者である」という意識を持つよう指導している。したがって、企画参加者はリハーサルに必ず出席しなくてはならない。Exchange Programのリハーサルでは、実際の流れとともに委員の動きの詳細な確認、そして英語原稿を読みながらの全体のシミュレーションを行う。ここで重要なことは、参加する学生に「自分の動きを体験させる」ことである。前述したように、企画担当者にとっては初めての企画であり、全体への目配りは容易ではない。また、すべての指示や説明が英語で行われ、日本語は原則として使用しない。さらに対象が留学生ということで、当日の緊張は察するに余りある。その中で、参加する委員学生が動きや流れを把握していなければ、企画の流れを停滞させることにもなりかねない。リハーサルで日本語を交えてその内容を確認

しておかないと、本番で動くことは難しい。リハーサルを実施する意味は、全参加者が当日の自分の動きを完璧に把握し、企画担当者の指示がなくとも的確に自分の役割を果たし、スムーズな企画運営につなげることにある。そのため、リハーサルに無断欠席した場合は、企画への参加を取りやめさせるという厳しい措置を取ることもある。

英語原稿作成、リハーサルと同時進行で、企画に使用する様々な道具や装飾の準備も行わなければならない。そこで企画に参加する学生には、この準備作業を手伝うように指導する。これは参加する学生一人一人に、企画を「創り上げている」という感覚を身につけてもらうためである。この作業が企画終了時に参加者全員の達成感につながる。

ここまで準備して本番を迎えるわけだが、それでも本番で想定外のことが起こるのが学生企画である。やむを得ず欠席する学生が出る、企画担当者の一人が病気になる、留学生が予想通りに動かない、PCがうまく動作しない、作業に予想以上に時間がかかってしまうなど、様々な事柄が本番では起こってしまう。そのような時に冷静に対処できるのはリーダーである。各企画にはサポートとしてリーダー4名の誰かが参加している。普段は参加者として動きながら、全体の動きを把握することが各企画におけるリーダーの役割である。本番で予想外のことが起こった場合も、企画書を参考に、全体の流れと参加するすべての学生の動きを確認し、流れを停滞させることなく企画が運営できるように、リーダーが企画担当者に適切なアドバイスを与える。特に1年生が企画担当者だった場合、想定外のことに対処できないことも多い。そのような事態も、リーダーのサポートによって臨機応変にクリアできたのを筆者は何度も目の当たりにしている。この時に注意することは、リーダーが決して高圧的になってはならないとい

うことであるが、この段階でその心配はほぼ必要ない。後期に入り、リーダーにはファシリテーターとしての役割を与えてきた。その中でリーダーは、委員学生に対してどのように接すればいいかを経験から学んできたのである。リーダーは適切に担当者をサポートし、企画を成功裏に終了へ導く。こうして企画が終了した後、企画担当者が達成感から涙を流すことが多い。もちろん涙する学生ばかりではない。全身で企画を成功させた喜びを表現する学生もいる。筆者はこのような姿が学生の成長の証だと考えている。企画担当者は、実施までの約2か月間で様々な困難に直面し、それを試行錯誤しながら一つずつクリアしてきたのである。この経験は学生を大きく成長させたに違いない。それは報告書を見ても明らかである。

企画終了後3日以内に報告書の第1版が提出される。企画全体に対する問題点がどの程度把握できているかを見るため、報告書第1版は企画担当者だけで作成するように指導している。それを顧問は添削指導するのだが、反省点がかなりの確に指摘されていることが多い。特に企画書通りに実施できなかった点についての記述が詳細に書かれている。これは、最初は自分たちだけの仕事に集中してしまった学生が、リーダーの助けもあり、徐々に視野を広く持ち、企画全体に目を向けることができたことを示す。全企画の報告書添削が終了するのは例年Exchange Program終了後1週間ほどのことである。ほとんどの委員学生にとっては、Exchange ProgramのFarewell Partyで1年間の国際交流活動のゴールを見るが、顧問と企画担当者の学生にとっては、翌週がゴールとなる。ここまで集中力を切らさないようにしなければならない。

すべての報告書が揃う頃には次年度のリーダーが推薦され、GCセンター長や顧問とも相談のうえで決定される。こうして次の新リーダー育成期

間へとサイクルが移っていく。1年間を通じてほぼ休みなく企画が行われるため、学生も大変忙しいが、それだけ多くの経験があるからこそ、リーダーや委員学生が人間的に成長しながら、活動に対する達成感を味わうことができるのだと筆者は確信している。

3. 国際交流委員会学生指導における顧問の役割

最後に学生指導における顧問の役割について考えたい。とはいえ、国際交流委員会活動における顧問の役割は千変万化である。前章でみたように、英語の指導、マナーの指導、企画書・報告書作成指導など細分化すればかなり多くの役割がある。そこで、本章ではファシリテーターとしての顧問の役割と、学生との関わり方について考察したい。

3-1 ファシリテーターとしての役割

これまで見てきたように、顧問は常に学生の活動に積極的に参加し、見守るだけでなく、意見やアドバイスも述べる。ここで注意すべきは、教員の立場で上から指示をしているだけでは学生は育たないということである。学生指導に当たって、教員はファシリテーターとして学生に接することが必要である。ではファシリテーターとはどのような存在なのだろうか。森時彦は黒田由貴子の次の定義を引用している¹⁸。

- ① 中立的な立場で
- ② チームのプロセスを管理し
- ③ チームワークを引き出し
- ④ そのチームの成果が最大となるように支援する

この定義を国際交流委員会顧問の役割に照らし合わせたとき、②～④はそのまま当てはめることができるが、①については必ずしもその限りではない。教員として接する場合とファシリテーターと

して接する場合で関わり方が異なると筆者は考える。この点については、3-2で述べることにする。

ファシリテーターとして顧問が学生にかかわるのは、企画段階や、準備段階が圧倒的に多い。企画が進行していくと、学生たちの話し合いの中で新しいアイデアが次々と生まれてくる。しかしながら、当初の企画目的や本来進むべきプロセスから逸脱してくる場合も見られる。これはリーダーも班長も、話し合っている目先の状況だけを見てしまい、全体像を見落としているためである。そのような場合には、学生に企画の目的と方向性を再確認させる必要がある。企画の目的に立ち返り、それぞれの意見が企画の方向性に対して適切かを委員の中で議論させる。こうすることによって、活動の流れを止めることなく、軌道修正を図ることが可能となる。企画に限らず、班長会などのミーティングでも、その目的と方向性を意識させてミーティングを進行させる。大切なのは、議論している学生の流れを止めないことである。集中して行われている議論を止めてしまうと、学生の集中力が切れてしまい、やる気を削ぐ結果になってしまう。逆にミーティングにおいて意見がなかなか出ない場合もある。その場合は、意見を出し合える環境作りに重点を置く。その時にも目的と方向性を明確にすることが効果的である。そしてどんな些細な意見でもいいから出してもらうように促すと、徐々に意見が出てくる。この時に建設的な意見かどうかは考慮しない。その場にいる委員がその議論や活動に参加できるような環境を整えることに集中すべきである。環境を整えば、学生の積極性も向上してくる。

このように、ファシリテーターとしての役割を果たすために、顧問は次の2点を意識する必要がある。第1点は活動を俯瞰していることである。活動の目的・テーマ・方向性を顧問が把握し、極端に逸脱することなく活動が流れていくようにサ

ポートしなくてはならない。そして、第2点は修正指示の出し方である。「○○しなさい」、「○○しなきゃ」という指示形式ではなく「○○したらどうなると思う？」や「○○したらどうだろうか？」という促しの形式をとる方がいい。これは学生に考えさせながら軌道修正するためである。自ら考えさせることは、作業に対する学生の意識を変えていくことに繋がる。4月から6月の始動期間の活動は、内容などもほぼ例年を踏襲する企画が多く、学生も「やらなければならない」という意識が強い。その中で「やらされている」作業を、自分たちが「やっている」作業に意識転換する、つまり、「やらされている感」を「やった感」に変えることが、顧問に課せられた大きな課題である。そのために顧問は、教師としての上からの指導を行うだけではなく、ファシリテーターとして学生の活動を支援する意識で学生とともに活動しなくてはならない。

そして、以上2点を意識しながら、「顧問のファシリテーターとしての動きをリーダーに見せる」ことが、ファシリテーターとして顧問の最も重要な役割であると筆者は考えている。ファシリテーターとして学生の活動をサポートする意味は、企画やミーティングなどのスムーズな運営だけでなく、リーダー4名をファシリテーターとして育成することにある。前章において、前期末の企画から、企画担当者をリーダーではなく他の委員にしていくことを述べた。そして夏合宿はすべてリーダーが会議の進行を行うことも述べた。それは国際交流委員会が全体で動かなければならない大きな企画において、リーダーには活動全体を俯瞰する立場にいてもらう必要があるためである。前期のうちにリーダー4名にはファシリテーターの役割を学ばせたいが、その意味合いや内容を言葉で説明しても実践するまでに時間がかかるので、筆者は自分がその役割をやって見せるようにしてい

る。リーダーに対して、ファシリテーターとしての顧問のやり方を見せながら、常に目的に立ち返ることを促し、企画やミーティングの流れと方向性を常に考え、自分たちで軌道修正しながら企画を進めていくことを学んでもらう。その結果として、前期末には、リーダー4人が全体を見ながら企画担当者にアドバイスを与え、企画書に沿った適切な方向へサポートする姿が見られるようになる。湘北祭の準備の様子を見て、リーダーがファシリテーターの役割を感覚的に行えるようになったところで、上述したような、より具体的なファシリテーターの役割や意識すべき点を指導する。それをExchange Programで実践するのである。Exchange Programの成否に関しては、ファシリテーターとしてのリーダーの成長が大きな要素となる。というのも、前章で述べたように、複数の企画書添削指導、英語原稿指導が休む間もなく繰り返されている中で、顧問による全体の俯瞰が困難になるためである。リーダーが各企画担当者とのコミュニケーションを密に取りながら企画をサポートするということは、前期に顧問が行っていた役割をリーダーが行うことに他ならない。失敗が許されないプレッシャーの中で、企画担当者の意見をまとめ、全体の流れを見ながら自分たちの作業も行うのは容易なことではない。しかし、企画終了後に企画担当者の表情を見ると、素晴らしい達成感に満ち溢れているのがわかる。これは企画者の成長の証しであると同時に、リーダーの成長の証しでもある。担当者をサポートしながらも「やった感」を持たせるというファシリテーターの役割を果たしたのである。時に驚かされるのは、リーダーと企画について話し合いをすると、顧問が指摘することに対してしっかりとした答えが返ってくることである。つまり顧問が指摘すべき要点に気が付いているのである。1年間でここまでの成長が見られれば、学生指導は成功したと

いっていいだろう。

このように、「ファシリテーターを育成するファシリテーション」を行うことが顧問の大きな役割といえよう。では最後に学生とのかかわり方について考えたい。

3-2 学生との関わり方

よく大学生の学生指導において「学生の自主性に任せ、教員の介入は最小限にするべき」といわれることがある。しかしながら、筆者はそうは思わない。むしろ積極的に学生の活動に入り込み、指導を行うべきであると考え。4年制大学ならば、3年次に世代交代するまで3年間という時間をかけ、先輩の行動を見ること、下級生を指導することの両方を学ぶことができる。一方、2年間の短大生活においては、たった1年間だけ先輩がいて、その姿に憧れを抱いたころには活動が終わり、自分たちが最上級生となり下級生を指導する立場におかれる。

この環境変化は急であり、学生の自主性に全て任せていては、活動中に前年同様の問題に直面してやっと気づきを得て、成長し始めた頃には世代交代の時期という事態になる。「学び」という意味において、それ自体悪いとは言えないかもしれない。しかし少なくとも4月から姉妹大学教員Welcome Partyのような、大学を代表する企画を実施する国際交流委員会にとっては、早い段階で2年生に指導的立場の学生として成長してもらわなければ、企画を実施させることもできなくなる。そのため、国際交流委員会の学生指導においては、外から見守っているのではなく、学生の中に入り、学生と密接に関わりを持ちながら指導することが重要である。筆者は、特に上述した「新リーダー育成期間(1月～2月)」には、リーダー4人と積極的にコミュニケーションを図り、「新国際交流委員会始動期間(3月～5月)」には、他の2年生と積

極的にコミュニケーションをとる。これは、2年生をリーダーとして育成するのに重要なプロセスであると考えているためである。前章で述べたような様々な形でコミュニケーションをとることで学生を理解することができ、各学生に適した指導が可能となる。そして企画の際に筆者は指導やサポートを行うだけでなく、時には作業に手を貸すこともある。このように、常に学生のそばにいて、学生とともに企画に参画することによってはじめて、顧問の指導が浸透する素地が整う。顧問の指導が自分たちのために行われているという認識を持つことで、信頼感が生まれ、自分たちの活動をバックアップしてくれる顧問がいるという安心感が、安定したアグレッシブな企画実施につながるのである。

筆者はこのプロセスをロッククライミングに例えることがある。いきなり初心者に岩登りをさせるのではなく、①まず指導者が登って見せる、そして②ロープで確保して登らせる(=サポート)のである。①で大切なことは、登りながらベストなルートを示すこと(=コミュニケーション)である。そして②が重要なのだが、最初はいつ滑落してもいいようにロープを張ってサポートするが、徐々に自分の力で登りやすくなるようにロープの張力を調整していく。これを繰り返すことでだんだんと自分の力で登ることができるようになり、レベルアップすれば自分が仲間をサポートできるようになる。このプロセスにおいて、最初から指導者が下から見守りながら指示するだけでは上達しない。言葉で指示しても、必死に岩にしがみついている側からすると、指示の意味も分からないからである。指導者を信頼し、上達し、今度は自分がリーダーとしてロープを確保して仲間を登らせる。これは学生の活動においても全く同様なのである。指導者との信頼と安心感がなければ、厳しい指導を受け入れながら垂直の壁は登れな

い。同じように、顧問と学生との間に信頼関係がなければ、顧問の指導を受け入れ活動することはできないだろう。そして、学生が自分たちの力で活動をコントロールできるまで、顧問は常に学生の中において徹底的にサポートしなければ、学生のレベルアップは見込めない。

国際交流委員会顧問としての学生とのかかわり方は、どちらかといえば、高校部活動の顧問のそれに似ているだろう。顧問は常に学生の活動と共にあって、学生の活動に介入し、学生の中に身を置いて指導をする。その際に、教師として指導者の立場を前面に出して学生指導をすることもあれば、ファシリテーターとして客観性を持った位置にいることもある。この点において、3-1のファシリテーターの定義①「中立の立場で」というのは、顧問の役割としては必ずしも当てはまらない。学生の成長と活動の方向性を考え、必要であるならば強制的にでも指導を行わなくては、時間が足りないからである。第2章で、各企画における指導内容について詳述したが、「手を出し過ぎている」と思われたかもしれない。しかし各育成期間に行われる企画には、学生の人間的成長のために学ぶべきテーマがある。学生が成長するタイミングを逃してしまえば、同じチャンスは回ってこない。そのためその場面に応じた指導を適切に行い、教師として、ファシリテーターとして常に学生の近くに身を置いていることこそ最良の学生とのかかわり方であり、国際交流委員会顧問の重要な役割であると筆者は考える。

おわりに

本学の教育理念は「社会でほんとうに役立つ人材を育てる」であり、具体的には、以下を目指している。

「覚える人」から「考える人」

「聞いている人」から「自分の考えを表現できる人」
 「誰かに決めてもらう人」から「自分で決めて実行する人」

このような人材育成は、社会的なニーズが大きいにもかかわらず、従来の授業や研究の合間に学生指導をするという姿勢では難しいと言わざるを得ない。見守って、助けを求めて来たらサポートする姿勢では学生が十分に成長できないのである。

一方で、国際交流委員会学生は、上述の3点全てにおいて人間的に成長する。リーダー4名はもちろん、中心となって積極的に活動していた委員は、1年間に行われる多くの企画を通じて、大人としての常識やマナーを学び、コミュニケーション力や企画力、問題解決力などのスキルや、自ら考え、表現し、実行する人間力を身に付けて卒業するのである。しかしながら、この成長が見られるか否かは指導のタイマー一つで変わってしまう。そのため、顧問は常に学生とともに活動しながら、学生一人一人の成長のタイミングを逃さないようにしなくてはならない。このように述べると難しそうに見えるが、顧問として筆者が常に考えていることは非常にシンプルである。「学生と活動することを楽しむ。」学生と一緒に様々な活動をし、一人一人の学生に真摯に向き合っていれば、学生の人間的成長を促す指導はそれほど難しいことではないだろう。顧問が学生に対して全力で向き合い続けることこそ、どのような教育手法よりも効果的な学生指導だということを筆者は確信している。

本論を執筆しながら、筆者が顧問としてどのような指導をしているのかを見つめ直す機会を得た。そして、さらに効果的に学生指導ができる余地があることがわかった。今後も熱意をもって学生指導を行い、学生の成長を最も近くで見たい。

注

- 1 本学国際理解教育の変遷および支援体制の詳細については、湘北短期大学 グローバルコミュニケーションセンター編『国際交流体験教育の多面的展開—実践的コミュニケーション能力育成プログラム—』（2004）を参照。
- 2 この人数に設定しているのは、班ごとでの話し合いやグループワークがスムーズに実施できるからである。ただし、1班10名構成は、委員学生数が100名程度の場合である。実際の班の数、および各班の人数は、委員の総数により増減がある。
- 3 図1は平成25年度の組織図。この年は2年生がリーダー含めて20名に対し、1年生が135名という構成だったため、9つの班に分け、各班2年生2名（班長・副班長）に対し1年生15名という変則的な構成であった。なお、リーダー2名が9班の班長も兼任した。
- 4 通常は班長を1名選出し班の運営に当たらせるが、図1のように委員数が100名を超えてしまい、各班の人数が大幅に増えた場合には、2年生から副班長を選出し、班長とともに班の運営に当たらせる。
- 5 リーダーズキャンプは学友会委員会及びサークルの主要メンバーが一堂に会して行われる会議。1月、3月、5月、8月に実施され、1月には主に各委員会の引継ぎが主題となる。
- 6 Campus Life Information は入学式後、新入生に対して行われる簡単な委員会・サークル紹介。
- 7 本学では、学友会委員長で構成されている学友会執行部が、勧誘用のポスターやビラの作成に協力する体制をとっている。
- 8 4月に入り本学では勧誘期間が設けられ、その期間内でビラを配布することができる。種類を多く作成したのは、毎日異なるビラを配布するためである。この方法の成果は説明会参加者約100名という数に表れている。そのうち50～70名が新入会者として委員会に参加する。
- 9 後述する招聘教員 Farewell Party、Exchange Program の Welcome・Farewell Party も同様の性質を持っている。
- 10 ただし、人数が極端に多い場合、親睦会など日本語で実施する企画を、リーダー以外の委員に担当させることもある。

- 11 夏期休暇中に、各委員長をはじめ、委員会の中心学生により後期活動に向けての話し合いが行われるリーダーズキャンプが実施される。夏合宿で保留になった議題に関しては、リーダーで意見の集計を行い、リーダーズキャンプ分科会で再度話し合いを行う。
- 12 試作会には顧問やGCセンターの教職員も参加し、アドバイスを与える。
- 13 書道体験、茶道体験、日本伝統遊び、かるた、日本の伝統芸能学習など
- 14 まれに、友人同士で企画を担当したいという申し出から、担当者が4名程度になる場合もある。しかし仕事量に差が出る場合が多いことから、原則として2名が望ましいと筆者は考える。
- 15 湘北祭のシフトは班単位で構成されている。
- 16 場合によっては Exchange Program の企画をリーダーが担当することもある。
- 17 2-1 参照。
- 18 森時彦『図でわかる！すぐに役立つ！ファシリテーターの道具箱』P.2。

参考文献

- 湘北短期大学 グローバルコミュニケーションセンター編 『国際交流体験教育の多面的展開—実践的コミュニケーション能力育成プログラム—』 2004年
- 森時彦 『図でわかる！すぐに役立つ！ファシリテーターの道具箱』 ダイヤモンド社 2008年

Coaching IEC Students

- Practical Introduction of Facilitation for College Students and the Role of Teacher -

Toshiyuki YAMAGATA

[abstract]

Shohoku students carry out a lot of energetic activities on campus. Coaching students is one of the big duties of teachers who take care of a committee or a club. In this paper, we divide a year into five periods and introduce how to coach International Exchange Committee (IEC) students in various activities held in each period. We will describe how students develop as mature persons through these activities. Also we will consider the role of teachers: how we should take an active role in coaching, and how we should energetically involve ourselves in the students' activities.

[key words]

Education, Instruction, Facilitation